

寺報 得源寺



第7号

発行 = 真宗

大谷派得源寺

住職大橋友啓

☎0767-68-2096

黙っていられません！

住職 大橋友啓

真宗の作法のほとんどは「阿弥陀経」からとされています。「仏説阿弥陀経」の中には、極楽の様子が書かれている箇所があります。

新型コロナウイルス対策緊急事態宣言の期間延長の禍中、いかがお過ごしでしょうか。大相撲初場所千秋楽の国歌斉唱の演奏を黙って聞き入ったり、節分の豆を黙ったままで鬼に向かって投げつけたたり、新型コロナウイルス対策として「黙飲」「黙食」といった人前ではやべらないということが始まりました。

月命日のお宅に伺い読経するなんぞは、違法な行為なのでし

ようか。二月は得源寺門徒にとっては「報恩講」の月です。家族が一回に会し「正信偈」を唱和することを大切にできた仏事です。唱和を控えることは可能でしょうが、住職が黙って「黙読」という訳にはいかないと思います。

彼国常有・種々奇妙・雑色之鳥・白鶺鴒(ビヤッコ)・孔雀(クジャク)・鸚鵡(オウム)・舍利(シヤリ)・迦陵頻伽(カリヨウビンガ)・共命之鳥(グミョウシチヨウ)・是諸衆鳥・晝夜六時・出和雅音。とあります。

かの国には常に種々奇妙雑色の鳥あり、白鳥・孔雀・オウム・舍利・迦陵頻伽・共命之鳥なり、この諸々の鳥は、晝夜に六回和して雅な声でさえずる。

この六羽の中で共命之鳥だけは架空の鳥ですが、ほかはインドに実在する鳥で一日の内、晨朝・日中・日没・初夜・中夜・後夜の決まった時間に一齐に鳴き、極楽の隅々に雅な鳥の音が響き渡るのだそうです。この鳥たちの鳴く時間に経を

読むというのが私たち真宗の読経作法です。

得源寺でも、お朝事、お日中(午前中は月忌参り) 祠堂経などで法要があるときは、午後二時からお日中の読経があり日没勤行に当たるお速夜を参詣のみなさんと一緒に勤めています。夜のお座があった時には、午後八時からお初夜と称し勤行と法話がありました。

いずれも、「仏説阿弥陀経」に書かれている極楽の鳥が鳴く時間帯に読経か正信偈のお勤めをしているのですが、中夜と後夜は、夜中のことで真宗の作法では行っていないです。

このように、極楽の鳥に代わって日常の暮らしの中で行う読経は、声を発することに意義があるわけで、住職のスマートホンから流れる「阿弥陀経」を、お内仏の前で家族と一緒に聞き入っているというような場面は想像したくありません。

“ご坊様も寺もいらぬ”という時代ですが、黙ってないで「神も仏もあるもんかあ」と叫んだ者だけが出遇うことのできる仏教が真宗です。

新年の総代会

二月五日金曜日午後三時から得源寺で総代会を開催した。

コロナ禍に対応した新年度事業の確認と住職から諸般の報告があった。

また、新型コロナウイルス対策のために延期してきた「今更講座」Ⅱを「帰敬式」をテーマに五月に開催をすることにした。

さらに、現行の総代は三月末に三年の任期を迎えることから、三月中に新体制を整えることを申し合わせるとともに、女性の総代を一名から二名にしたいとの住職の意向がしめされた。

さらに、能登教区第一四組の新しい得源寺門徒会員として吉村稔氏、大橋幸子氏、大橋宏一氏の三氏を選出した。

お知らせ!!

(二〇二一年二月〜五月)

春の祠堂経会

とき 三月一六日(火)から

二〇日(土)春分の日

午後二時 お始まり

講師 谷中 祐照氏

(輪島市町野町通 敬寺住職)

帰敬式講座

とき 五月二一日(金)

午後八時から一夜

限りの講座です。

場所 得源寺庫裏

如事 幾等

今号の脳トレ

引き続き、字に

戦

真ん中の口 字 を入れ

だ

※ は は 離 「聞」 の 際

種 は 扱 ず

刃や薙

毎月第二火曜日の午前一〇時

から正午まで本堂で開催しているヨガの受講者を募集します。

対象年齢は問わないそうです。

珠洲にお住いでネパール出身の

女性の先生が指導します。詳しく

は寺へ ☎六八―二〇九六

小さなお葬

最近よく耳にしたり目にしたりする「小さなお葬式」ですが、

仏式の葬儀は元々そんなに派手

なものではありませんでした。

告別式やお別れの会を無理やり

葬儀と併修してきたがために遺

体や遺影が中心になり、訳が分

からない葬儀となっています。

ご本尊を中心にした仏式の葬

儀をご希望の方は、寺に相談し

て見てください。

雨

前号の答えで〜す。水でも良かったかな



共命之鳥

ぐみょうしちよう

前頁で極楽に住む架空の鳥として紹介した鳥です。

この鳥は、胴体が一つで

人のような顔を二つ持つと

いう奇怪な鳥です。二つの

顔は互いに仲が悪く、いつ

も喧嘩をしていました。

ある時、喧嘩が過ぎて片

方が毒を飲ませたのです

が、自分が死ぬとは思って

いませんでした。毒がまわ

って記憶が薄れていく中で

初めてお互いの存在の重大

さに気がついたという悲し

い鳥です。

地球という一つの星に住

むものとして、国と国が互

いにもっと仲良く暮らせな

いものかと思えます。

新型コロナを機会に互い

の知恵を出し合って、世界

中から新型コロナを一掃す

る日まで一人ひとりができ

ることをしっかりとやりな

がら見届けたいものです。

(釋友啓)